



特集
土木遺産Ⅱ
時を超える技術者のこころ ハンガリー

Special Features
Engineering's Heritage Ⅱ
Engineer's Feeling Surpassing the Time Hungary

Szechenyi Bridge 鎖橋

ブダペストに架かる重厚なる鉄の吊橋

ハンガリーの首都・ブダペストは、「ドナウの真珠」あるいは「ドナウの薔薇」とも呼ばれる美しい水都である。都市の中央をドナウ川が流れ、西側に王宮を擁するブダ、東側に商業都市ペシュトが広がる。その東西の性格の異なる都市が一つになってブダペストが生まれたのである。

ドナウ架橋が実現する以前、ブダとペシュトは時折氾濫するドナウ河によって隔てられ、洪水のたびに流されるような危うげな浮き橋で結ばれることはあっても、たやすく横断できる状態にはなかった。それを変えたのが鎖橋である。その後、ドナウ川には次々と異なる構造形式の橋が架けられていくのだが、この中でも、鎖橋は最初の橋にして、最も美しい橋といわれる。

1—歴史の証人

鎖橋は正式にはセーチェニー橋と呼ばれる。ドナウ川を挟む2地区を結ぶ架橋プランは18世紀末ころからあったが、それが実現するのは19世紀半ばが近づいた

ころである。半世紀ほど停滞していたドナウ架橋を後押ししたのは、イシュトバーン・セーチェニー伯であった。セーチェニー伯は鎖橋を発想し、計画し、資金調達して実現に漕ぎつけた。

1839年、イギリスのT.W.クラークの設計により、アダム・クラークが施工にあたった。10年後の1849年、鎖橋はブダとペシュトを初めて永久に繋ぐ橋として完成し、以降ハンガリーの首都を彩るシンボルとなった。鎖橋は延長375m、幅員16mで、両岸には一対の石造の塔門が配されている。チェーンはイギリス、桁はハンガリーでそれぞれ鑄造された。その202mの中央径間は、建設当時有数の大スパンであった。

建造後60年を経過した鎖橋は、市内の交通量の増加に対応するために、1914年に再建されることとなった。増加する自動車交通の大きな活荷重に耐えるような構造が取られた。しかし第二次世界大戦の戦火にさらされたブダペストにはナチスドイツ軍とソ連軍が入り乱れ、町は



山田耕治
YAMADA Koji
日本工営株式会社/首都圏事業部
事業推進室/室長代理



灰燼に帰する。ナチスドイツ軍は退却する際にドナウ河にかかるすべての橋を爆破した。鎖橋も中央径間が破壊されたが、戦後の1947年、建設当時の姿を可能な限り再現しながら復元された。

さらに1956年、鎖橋はハンガリー動乱を体験することになる。ブダ側に市民軍が、ペスト側に駐留するソ連軍が対峙し、文字通り銃弾が橋桁に降り注いだ。鎖橋はブダペストの激動の歴史の証人でもある。

2—鎖橋の謂れと魅力

鎖橋(チェーン・ブリッジ)というと、ネックレスのチェーンのように輪が互いに繋がったイメージを持つかもしれない。しかし鎖橋の構造を支えるのは鉄板の両端に穴をあけ、数枚を重ね合わせた上でピンジ状に固定するというものである。鎖というよりは、自転車のチェーンに近い。

こうしたチェーンによる吊橋形式は1820年代ころからヨーロッパを中心に建造された。ブダペストの鎖橋は現存するこの形式の橋の代表作の一つとあってよいだろう。日本では、隅田川に架かる清洲橋が同様な形式である。チェーン吊橋はその自重により、構造体としては重厚かつ堅固なものとならざるを得ない。チェーンその



ものの自重が大きいため、一歩間違えると落橋事故に見舞われやすい。後に、より軽い鋼鉄製ワイヤーが構造部材として一般化すると、チェーン式の吊橋はあまり作られなくなった。しかし、不思議と鎖橋では、この橋にとって不利な条件が、その姿を安定感と質感に満ちた、忘れたくないものになっている。

鎖橋を含むブダペストのドナウ河畔地区は、ユネスコの世界遺産に登録されている。ちなみに世界遺産に登録されている鉄橋はイギリスのアイアン・ブリッジと鎖橋の2箇所しかない。

〈参考文献〉
Historic Danube Bridges in Budapest, A paper by Miklos Ivanyi, Prof., Budapest University of Technology and Economics, Hungary.

- 写真1[前頁]—河岸から見た重量感のある鎖橋
- 写真2[左上]—王宮の丘から見下ろした鎖橋
- 写真3[右上]—鑄鉄を数枚束ねて固定したチェーン
- 写真4[左下]—チェーンの部材
- 写真5[右下]—橋上から王宮の丘を臨む

(写真：2、5、塚本敏行 他、筆者)

